日本グループ・ダイナミックス学会会報

ぐるだい JGDA ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

http://www.groupdynamics.gr.jp/

第 51 号

（2017 年 8 月 25 日）

発行所： 立正大学心理学部　西田公昭研究室
日本グループ・ダイナミックス学会
E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp
発行人：西田公昭　　編集担当：杉浦淳吉

目次

★☆★　新会長の就任挨拶★☆★ 1
★☆★　新運営体制のご案内★☆★ 2
★☆★　日本グループ・ダイナミックス学会第 64 回大会開催の挨拶★☆★ 4
★☆★　『実験社会心理学研究』が変わります★☆★ 5
★☆★　社会とつながるグループ・ダイナミックス★☆★ 7
★☆★　広報用の Twitter アカウント開設のお知らせ　★☆★ 9
★☆★　グルダイ学会関係連絡先　★☆★ 9

★☆★　新会長の就任挨拶★☆★

日本グループ・ダイナミックス学会会員の皆さま

皆さまにおかれましては，ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。本年度より，新たに会長として任命されましたので，この誌面を借りまして，一言，ご挨拶させていただくことになりました。まずは，たいへんふつつか者ではございますが，これから 2 年間，どうぞ，よろしくお願いします。

さて個人的に掲げたいテーマは，Beyond Academism です。私的な思い込みにすぎない可能性もないわけではありませんが，このところ社会的現場における本会の知名度は，徐々にさがり続けているのではない

かと危惧しております。グループ・ダイナミックスというのは，多くのメンバーがアイデンティティとする社会心理学とも異なるスタンスを持っていて良いし，本学会のアイデンティティは，それよりかはもっと現実社会と近いところにあった方がよいのではないかと考えます。もちろん，すべての各研究成果が，社会問題の解決に直接的なインパクトを現場に提供できるものであれということでは全くありません。ただ，抽象的な基礎研究やフィールド調査研究といった各メンバーの成果がどのような現場に活かされるのかを積極的に示しつつ，Lewin 流にいえば，本学会が一つの「力動的全体」として，もっと機能すればいいのにという希望を抱いております。

なお，もちろん会員の皆様におかれましては，こんな私とは異なる社会的意義の発展を本学会に期待しておられるのかも知れません。私は，それはそれでダイバーシティとして受け止めて，風通しよく本会の運営を行って参りたい所存です。早速にも，機関誌のさらなる充実，会の活性化，支援制度の見直し，理事選挙投票率の向上など，必要と思われる改革や検討に取り組んでおります。どうか，全ての会員の皆様におかれましては，本会へのコミットメントをさらに高めていただき，本会のさらなる発展に向けて，ご指導，ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

2017 年 8 月吉日

会長　西田公昭

★☆★　新運営体制のご案内★☆★

2017 年 4 月より新しい体制で本学会の運営を行っております。新体制発足時(本年 4 月)にグルダイメールマガジン(JGDA_Flash)でご案内しておりますが，その内容を再掲しながら，改めてご案内させていただきます。

会長

西田公昭（立正大学）

プロフィール：http://ris-shinri.jp/i-04/

事務局長

西道　実(奈良大学)

事務局として，会員同士が出会い，情報を交換し，協働する“場”を全力でサポートします。他方，本学会のサステナビリティを高めるため，予算や事務作業のスリム化にも取り組みます。

プロフィール：http://researchmap.jp/read0202749/

編集長

三浦麻子(関西学院大学)

これからの 2 年間，学会誌『実験社会心理学研究』の編集長を務めることになりました。副編集長の石井敬子先生とともに，国内研究の醸成・活性化を目指して，高いレベルの質とアクティブさを追究するべく取り組みます。皆さんからの活発なご投稿が頼りです。どうぞお力添えのほど，どうぞよろしくお願いいたします。

プロフィール:　http://team1mile.com/asarinlab/

副編集長

石井敬子（神戸大学）

2 年間，三浦編集長をサポートしながら，何らかの形で学会誌の発展に貢献できればと思います。よろしくお願いします。投稿をお待ちしております。

プロフィール：　http://www2.kobe-u.ac.jp/~ishiik/

渉外担当

中島健一郎（広島大学）

主に「論文の国際化支援制度」と「国際学会発表支援制度」を担当しています。

いずれも，会員のみなさまに役立てばという気持ちで始まった制度です。論文の国際化支援制度はおかげさまで申請者が増えていますが，国際学会発表支援制度の申請者は少なめです。言い換えれば，ねらい目です。いずれも今年度の申請を受けつけています(注)。みなさんからの募集をお待ちしています！

(注)：国際学会発表支援制度は 7 月末で締め切られました。1 件の応募がありました。論文の国際化支援制度については引き続き年度末まで募集をしております。会員のみなさまからの応募をお待ちしています。

プロフィール：https://kennakashi.jimdo.com/

広報担当

杉浦淳吉(慶應義塾大学)

まずは速報を「JGDA Flash」としてメール配信することからスタートしました。今までの広報の業務を引き継ぎつつ，より社会とつながるようなグループダイナミックス研究の広報ができたらと考えております。「ぐるだいニュース」の企画をはじめ，「JGDA Flash」で発信したい情報がございましたら，ぜひお寄せください。

プロフィール：http://jsugiura.eco.coocan.jp/

大会担当

有倉巳幸（鹿児島大学）

中島先生とともに引き続き担当します。役割としては，大会関連の業務，特に，優秀学会発表賞の担当をしております。あと，２年に一度ですが，役員選挙の担当もしております。学会発表賞も役員選挙も会員の皆様の積極的な参加があって，活性化すると思います。どうぞよろしくお願いします。

プロフィール：http://ris.kuas.kagoshima-u.ac.jp/html/100004616_ja.html

★☆★　日本グループ・ダイナミックス学会第 64 回大会開催の挨拶★☆★

大会準備委員長　唐沢かおり（東京大学）

残暑厳しい折，皆様いかがお過ごしでしょうか。さて，学会大会まであとひと月あまりとなりました。今年度の学会大会は，東京大学本郷キャンパスにて，9 月 30 日，10 月 1 日の二日にわたり開催することになっております。このころには，少し暑さも和らぎ，東京も過ごしやすい季節を迎え，台風などに襲われることなく，さわやかな秋晴れの中で学会当日を迎えることができればと願っております。

発表登録システムがオープンになって以来，多くの方々に参加いただけることを心待ちにする日々でした。一週間の締め切り延長の措置後，おかげさまで発表件数 101 件と例年並みの規模で学会を開催できることになりました。

今回の大会では準備委員会から「社会心理学の意義を語る：知としての価値，そして公共性」というタイトルの企画シンポジウムを提案させていただきました。登壇者は長谷川寿一先生，戸田山和久先生，浦光博先生，亀田達也先生です。社会心理学の内外からご意見をいただき，私たちが日々携わる「知の産出」の意義を考える機会になることを期待しております。

また，次世代を担う人材育成を目的とし，学会常任理事会との共同企画として，学部生の方々にも口頭，またはポスターでの研究発表をしていただく機会を設けました。13 名の学部生の方が今回エントリーしておられます。初めての学会発表が楽しく有意義な場になるように，皆様方からの活発な議論とエールをお願いいたします。

もちろん，「活発な議論」は，参加するすべての方々にとって，学会大会という場の本質です。大会会場は「登録有形文化財」に指定されている歴史ある建物ですが，そうであるだけに「近代的な設備を持つ」とは言い難く，ネット環境をはじめとしてご不便をかけることもあるかと思います。準備委員会としては，それを補い，皆様に研究について心行くまで語り合う時間を共有していただけるよう，準備と当日の運営につとめる所存です。

昨今，出張時などに宿泊を確保することがむつかしいという話題を耳にします。東京もその例外ではなく，多くの観光客の方が訪れる時期でもあります。遠方からのご参加をご予定の方々で宿泊施設をいまだ確保なさっていない場合は，早い目のお手配をお願いいたします。幸いにして，本郷キャンパスは，アクセスの良い場所に位置しており，最寄り駅も複数ありますので，都内や近郊の多くの箇所から比較的短時間で，お越しいただけます。

正門から通ずる銀杏並木から見た法文 1 号館
（メイン会場）

いまだ参加申し込みをなさっておられない会員の皆様方も，ご都合がつきました

ら当日ご参加いただき，学会を盛り上げていただけますと幸いです。本郷にて皆様とお目にかかれますことを，準備委員会一同，楽しみにしております。

大会 WEB サイト　http://www-socpsy.l.u-tokyo.ac.jp/~jgda2017/index.html

★☆★　『実験社会心理学研究』が変わります★☆★

編集委員長・三浦麻子（関西学院大学）

機関誌『実験社会心理学研究』（以下，実社心研）は，より誠実かつ充実した形で会員各位の研究の活性化をサポートし，その成果を学術界のみならず社会に広く公刊するために，次のような改革を行います。学会規程（執筆・投稿規程および編集方針・編集体制）に関わる部分については年次大会時に開催される総会でご承認を得てからの発効となりますが，遠からず実施の運びとなるとお考えいただき，ご理解・ご活用のほど，よろしくお願いいたします。

論文カテゴリ“Short Note”を新設します

新しい論文カテゴリとして“Short Note”を新設します。英語で書かれた 2,500 words 程度（本誌 4 ページ程度）の論文で，内容としては，既に公刊された研究成果の再現性検証，速報性を重視した報告，萌芽的発想に立つ報告などを想定しています。速報性を重視し，迅速な審査を行います。具体的には，編集委員会の中で WG（正副委員長および編集委員数名により構成）を作り，この WG から原則として正副委員長のいずれか 1 名を含む 2 名が査読します。そして，1 回目の審査で Accept / Minor revision / Reject を判断し，原則として 2 回目の審査で Accept / Reject を決定します。

掲載決定論文は可能な限り速やかに電子ジャーナルで早期公開します

実社心研は 1 年に 2 号を，通常スケジュールでは 8 月と 2 月に刊行しています。掲載できる 1 号あたりの論文数には限りがありますので，せっかく掲載が決定してもタイミングによっては長くお待たせする場合がありました。しかし，J-STAGE の早期公開制度を活用すれば，書誌情報と論文 PDF を冊子に先んじて迅速に，しかも，オープンアクセスで公開できます。

掲載決定からのプロセスは，英文要約校閲→組版→著者校正→編集委員長校正（必要があれば著者による確認と修正）→J-STAGE 公開用コンテンツの作成と編集委員長による確認→公開，です。最終稿に出版上の問題が少なく，また著者が協力的に行動して下されば，掲載決定から 1 ヶ月半程度で早期公開が可能です。高額の掲載料を徴収する国際誌の迅速さには至りませんが，なるべく早く論文が公開できるよう，編集事務局や校正の担当者（いずれも中西印刷）は努力して下さっています。

投稿時に「チェックリスト」を提出していただきます

既に 4 月以来，任意でのご協力をいただいてきた「チェックリスト」提出を投稿の際の必須要件として定めます。論文が学術論文として適切な内容であることと，倫理的に問題のない手続きで実施されたことを，投稿時に表明していただくものです。こうした事項はもとより「当然」そうあるべきことですが，投稿者と編集委員会および審査者がその遵守について互いに確認し合うために，新規投稿時，および査読を経た改稿時に「チェックリスト」として提出していただきます。新規投稿時のチェックリストはこちらをご覧下さい。

また，研究者の Questionable Research Practices（問題のある研究実践）のうち，剽窃や盗用は故意の有無に依らず厳に慎むべきものです。著者の心がけはもちろん，掲載誌としてもこの点について努力すべきと考え，論文投稿時と掲載時に，剽窃検知ツールによる検証を行うべく準備中です。具体的には，J-STAGE が導入している「Similarity Check」サービスを利用します。詳細はこちらをご覧下さい。

電子付録の活用を勧奨します

科学的な知見の信頼性や妥当性を確認するための重要な手段に，再現性の検証があります。そのために，あるいは，ごくシンプルに研究をよりよく理解するためにも，紙幅や表現手段の限られた「論文」には含めることができなかった情報，例えばデータやマテリアル（実験刺激，調査票，手続きの詳細など）を公開・共有することが効果的です。実社心研では，J-STAGE のオプション機能「電子付録」を活用して，こうした情報を公開することができます。ただし付録として公開することを希望する情報は，初回投稿時あるいは審査の過程で必ずご提供いただき，審査を経たものであることを前提とします。電子付録の利用に際して投稿者に特別な費用負担をお願いすることはありません。

以上，実社心研の何がどう変わろうとしているのか，主要ポイントをご説明しました。規程だけではなく，主査・副査の審査票や諸注意事項なども細部にわたって見直し，現状に合わせた修正を行い，また，審査プロセスの効率化にも努めています。科学全般，特に「文系」学問の研究環境は引き続き厳しいものがあり，また研究の国際化やオープン化が進む潮流の中で，実社心研をどこにどう位置づけるべきかを考えさせられる機会も増えています。しかしそうであるからこそ，また学会として機関誌を刊行する以上は，冒頭に申し上げたような研究の醸成・活性化のための努力を惜しんではならないと考えています。会員各位からの改善提案もお待ちしています。引き続き，良質な論文の活発なご投稿と迅速かつ的確な査読へのご協力をよろしくお願いします。

★☆★　社会とつながるグループ・ダイナミックス★☆★

本学会では今までもグループ・ダイナミックス研究が社会といかにつながっていくのか，論じられてきますが，特に今期の常任理事会では，そうしたことを本学会の特徴として打ち出していくべく議論を重ねております。そのような折に，グルダイメールマガジン(JGDA_Flash)で配信したシンポジウムが話題の１つとして挙がりました。
https://lynx.let.hokudai.ac.jp/~numazemi/wp-content/uploads/2017/04/0d995e40a44de457676dfb0756c1a2af.pdf

実践的な事業を学会で何かできないか，それを考える上で参考になるかということから，このシンポジウムの内容をプロジェクトの代表者である大沼進先生(北海道大学，非会員)にご紹介いただくことにしました。学会として取り組んでいきたい課題であり，今後会員の皆さまからも，「このような実践を行っている！」といった報告をいただけたらと考えております。

合意形成のプロセスデザインの実践としての社会心理学

大沼進
（北海道大学文学研究科行動システム科学講座／社会科学実験研究センター）

はじめに，このような機会をいただけることに深く御礼申し上げます。この場を借りて，現在取り組んでいるプログラムを紹介させていただきます。

現在，日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（実社会対応プログラム）による『私益と共益が錯綜する公共的意思決定のプロセスデザインに関する研究』をさせていただいております。このプログラムでは，理論的・実証的な根拠を示す学際研究をしながら，具体的な政策提言に繋げることが求められています。私が代表の課題では，北海道環境財団を実務者のパートナーとして，経済学や社会学を専門とする共同研究者のお力を借りながら，北海道を舞台とした環境政策に関連する調査研究を進めております。北海道環境財団は，環境省北海道環境パートナーシップオフィスを運営し，道内の自治体担当者と協働で事業を実施しており，ＮＰＯなど市民団体が加わる場合も多いことから，こうしたネットワークを活用してプロジェクトを推進しています。

このプロジェクトの特徴は協働実践で進めることで，プロジェクトの活動そのものが政策提言であり，同時に研究成果の社会還元となっていることです。多くの研究者の発想は，基礎研究がはじめにありきで，次に応用研究として考えていくという流れではないでしょうか。しかし，社会心理学とは，そのルーツからして，現場の問題を現場の人たちと一緒に解決していき，その中から理論も見出していくものですから(Lewin, 1946; 1947)，基礎研究と応用研究という境界を引くこと自体に意味がないとして協働実践・共同研究に入り込めるというアドバンテージがあるはずです。

このプロジェクトを実践的研究という観点から見たときに，鍵となる概念は「共通目標の共有

化」です。多様な価値や利害がぶつかり合う場合に，それを乗り越える上位の目標が必要となります。しかし，抽象的な理念を並べただけでは不十分で，現場の政策で求められるのはある程度具体性のあるゴールです。それも，一部の市民しか知らなければ絵に描いた餅で終わってしまいます。そこで，決定プロセスのいくつもの段階で，様々な市民やステークホルダーが適切に関与していくことが重要です。しかし，何でも闇雲に話し合えばうまくいくというわけではありません。異なる価値や利害をただぶつけ合うだけでは建設的な議論になりません。どの段階で，どのような枠組みで，どのような人びとが議論をしていくかというプロセス全体のデザインが重要になります。これが，プロセスデザインの研究の必要性の骨幹です。

具体的な活動の一例として，函館を舞台として，北海道環境財団が函館市や函館市地球温暖化対策推進協議会と共に活動を展開している夜景 LED 推進の取り組みを，社会調査や社会実験を通じてお手伝いしています。また，札幌市では第 2 次環境基本計画の策定に際して，無作為抽出による市民参加ワークショップを，計画策定前と，計画策定途中に実施しましたが，これにも運営主体の一人として関与しています。函館では観光客を対象とした調査や社会実験を実施したり，札幌市では住民基本台帳から母集団代表性の高いサンプルによる社会調査を実施したりと，学術論文になりそうなことも行っています。これらについては学会等の場でご報告していきますが，ここだけの話，それ自体はあまり大したことではありません。むしろ，舞台裏で起こっている関係主体間の調整，とくに，主体の向こう側にいる大勢の人たちの意向を汲みながら，誰にとっても不利や不満のないように組み立てていくプロセスそのものの方が難しく，やりがいもあります。このプロセスに客観的な観察者ではなく当事者の一人として入り込むことこそ，社会心理学の本質に迫るものがあると私は信じているのですが，残念ながら，それを表現する場が今の社会心理学業界には乏しいように感じます。この場をお借りして，一つだけお話をさせてください。

このプロセスデザインのプロジェクトでは，表には出てきませんが，社会的ジレンマの考え方が通奏低音として流れています。ただし，あらかじめ実験者が利得構造を用意して，諸要因が操作され統制された中で実験参加者の行動や認知を測定するような実験的発想とは異なります。現場で起こっていることをどのように切り取るかは一つではありません。それぞれの個人や集団ごとに自明だと思い込んでいる世界観があります。それは，集団規範，社会規範と呼んでも，社会的表象と呼んでも，何でもかまいません。合意形成のプロセスデザインで一番難しいのは，入り口の段階でこの認識の違いをお互いに相対化する作業です。このときに，社会的ジレンマというフレームを共有化する作業がポイントになります。つまり，社会全体にとって不利益になること，逆に，社会全体に取って望ましいことがある，ということを異なる価値を持つ人たちの間で共有化できるような話し合いの枠組みをデザインしていくのです。多くの関係主体が，（社会的ジレンマという用語は使わなくても）これは社会的ジレンマ状況だという理解を共有してくれれば，多くの場合，協力的に振る舞うようになるというのが私の経験則です（Dawes (1980)や Pruitt & Kimmel (1977)も，言い方は異なりますが似たようなことを述べています)。これが先に述べた共通目標の共有化のプロセスという鍵概念に繋がります。まとめると，社会がどのような構造になっているかは人びとの捉え方（世界観）に依存するが，ひとたび，社会的ジレンマ構造であるという認識が共有されれば，問題解決へ近づけるということです(大沼, 2011)。研究上の問いとしては，「どうすれば社会的ジレンマ状況で協力できるか（なぜ協力するか)」ではなく，「どうすれば当該問題を社会的ジレンマ状況にできるか」になります。しかし残念ながら，この「どうすれば

当該問題を社会的ジレンマ状況にできるか」という問いで学術論文になったものを私は見たことがありませんし，投稿してもまず査読者に理解してもらえません。

これは私が現場から学ばせていただいてきたことの一端に過ぎません。読者の中には，私の遠吠えなんかではなく，秀逸な隠された現場知や経験知が多く埋もれているのではないかと推察しております。社会心理学の原点に立った研究がより広がり，取り組みやすくなるよう，共にアクションをしてくださる方が一人でも多くいらっしゃることを願っています。

引用文献

Dawes, R. (1980). Social Dilemmas. Annual Review of Psychology, 31, 169-193.

Lewin, K. (1946). Action research and minority problems. Journal of Social Issues, 2(4), 34-46.

Lewin, K. (1947). Group decision and social change. In: Newcomb, T. and Hartley, E., (Eds.) Readings in Social Psychology, Holt, Rinehart & Winston, New York, 330-344.

大沼進（2011）. 環境問題の合意形成の社会的ジレンマ：個人や地域の利害と社会全体の利害は調整できるのか. 広瀬幸雄（編著）仮想世界ゲームから社会心理学を学ぶ. ナカニシヤ出版, pp. 99-113.

Pruitt, D. G., & Kimmel, M. J. (1977). Twenty years of experimental gaming: critique, synthesis, and suggestions for the Future. Annual Review of Psychology, 28, 363-392.

★☆★　広報用の Twitter アカウント開設のお知らせ　★☆★

本学会の活動をお伝えすべく，常任理事会の議を経て，SNS の 1 つである Twitter のアカウントを本学会の広報用として 2017 年 8 月 17 日に開設いたしました。

https://twitter.com/jgda_pr

大会の案内や論文の早期公開の情報などを発信するなどしております。Twitter ご利用の方，また使ってみたいとお考えの方，ぜひフォローしていただいて，本学会の広報を多方面にご紹介いただけますと幸いです。

★☆★　グルダイ学会関係連絡先　★☆★

本学会では，事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会，住所・所属等変更，会費納入，機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は，事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また，論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

事務支局【入退会，住所・所属等変更，その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会事務支局

〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入る

中西印刷（株）学会フォーラム内

電話：075-415-3661

FAX：075-415-3662

E-mail：jgda@nacos.com

学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局

〒631-8502　奈良市山陵町 1500

奈良大学 社会学部　西道研究室

電話：0742-44-1251 (代表)

E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

投稿論文・学会誌編集関連

【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミックス学会　編集事務局

〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入る

中西印刷（株）営業部編集校正課内

電話：075-441-3155

FAX：075-417-2050

E-mail：jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

【編集委員長】

三浦麻子（関西学院大学文学部）

広報関連

【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿，メールマガジンへのニュース記事投稿，新刊案内や研究会案内等のニュース記事，書評，公募情報など】

〒108-8345　東京都港区三田 2-15-45

慶應義塾大学文学部　杉浦淳吉研究室

E-mail：office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

また，マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も，同アドレスまでお送りください。

【編集後記】

現在の常任理事会の体制がはじまり数か月。今回のニュースでお届けしたような『実験社会心理学研究』の改革をはじめ，より社会とつながったグループ・ダイナミックス研究を目指すべく，新たな活動を展開していきたと考えております。広報として Twitter のアカウントを開設したのもその一環です。新たなグルダイ学会の展開を，ぜひ会員の皆さまとつくっていきたいと思います。広報記事のご提案をはじめ，ぜひご意見を広報担当までお寄せください。